





# 第5章

明日を模索する

# 十島村

河合 溪

(鹿児島大学多島圏研究センター)



“フェリーとしま”から見た小室の海 ©河合 溪

## トカラ列島

十島村は行政単位でいう十島村はトカラという名を持っている。口之島、中之島、平島、諏訪瀬島、悪石島、小宝島、宝島の有人島7島と無人島5島からなり、北端から南端まで160kmある。日本で一番長い村だ。

トカラは昔から人々や文化の交流が盛んな地で、ヤマト文化圏と琉球文化圏がぶつかる地域にあたる。そして中ノ島では縄文晩期のタチバナ遺跡が発見されている。トカラ列島の島々はすべて火



十島村歴史民族資料館に展示されている  
仮面神ボゼ ©河合 溪

山起源の島嶼である。

「十島村は日本の縮図だよ」と教えられた。北に位置する口之島、中之島、の人は勤勉でまじめだが、南の小宝島や宝島の人はおおらかでのんびりしているためらしい。単純な北と南という違いかと思つたら、他の理由を指摘された。北の島々は山高く海へと崖が突き出ているが、小宝、宝島は隆起サンゴ礁に覆われ山がなだらかだからだという。このような地形の違いが人間性の違いを形成している地元の人々は考えている。

また、十島村は神秘に満ちた村でもある。悪石島では仮面神ボゼが旧暦の7月に現れ、人々の身についた悪魔を追い払ってくれる。そして、多くの平家の落人がこの地域に住み着いたといわれる。宝島には海賊キッドが財宝を隠し、スティーブンスンの「宝島」はトカラの宝島を題材にして書かれたともいわれている。

この地域は生物学的にも非常に興味深い地域だ。悪石島と小宝島の間には生物の分布の境界を示す渡瀬線があり、温帯の生物と亜熱帯の生物がここを堺に分布を異にする。ハブは渡瀬線以南にしか分布せず、トカラハブは小宝

島、宝島だけに分布する。そして、この地域にはその他多くの貴重な生物が分布する。タモトユリは口之島の固有種で平家の落人が種を着物の袂に入れ持ってきたといわれている。6月下旬から7月上旬にかけ美しい白い花を咲かせている。しかし、昭和初期に乱獲さ

れたため、現在は絶滅危機に瀕している。トカラウマは西洋種の影響を受けていない小型の在来種で、県の天然記念物に指定されている。また、国の天然記念物に指定された野鳥のアカヒゲはトカラ列島を含む南西諸島に分布している。

## 汽船も 亦また道路なり

飛行場を持たない十島村にとって船は生命線だ。村は12の島から成るため、村内にいわゆる普通の道路はあまりない。“汽船も亦また道路なり。”「十島丸」就航に尽力した文園村長の言葉だ。村民の願いであった村営定期船「十島丸」は1933年就航した。

現在、医者には月に一回、船で来島する。食材、郵便物は船で運ばれる。店のほとんどない十島村では船で都会に出かけ買い物をする。週3回来る船の荷の積み下ろしは各島民が行うため、その時間帯を中心に島の生活は動いている。

2000年に「フェリーとしま」として新船が就航した。悪天候になると以前の船はよく欠航したが、この大型フェリーになり、欠航することはあまりなくなった。そして、少々天候が悪くても船内ではゆれは少なく快適



中ノ島にある航路開拓記念碑 ©河合 溪

である。「他の船が欠航になっても、“としま”は気にせず出航するんだよね」と村民の一人は私に言った。そこに彼の「フェリーとしま」に対する信頼と安心感、そして誇りが感じられた。

以前は船が停泊するための港湾は十分整備されていなかったため、沖に停泊した船の脇に小型船を横付けし人や船荷を積みおろす

## 十島村の産業構造

十島村の主産業は農業・牧畜だが、一次産業従事者は全人工の約20%と低い。その他水産業や公共事業の工事現場で働く人も多いが、一つの職を専業にしている人は少ない。民宿を経営しながら漁に出る人、農業を営みながら電力会社に勤める人などさまざま。「色々やってたほうが安全なんだよ」と漁師は言う。一つの仕事が必要な収入源にならないし一年中できる仕事が少ないことが原因らしい。

かつて村民は自給自足の生活を営んでいた。牧畜では肉用牛として黒毛和牛を放牧している。せりの時

「はしけ」作業が行われていた。小宝島では十年ほど前までこの「はしけ」作業が行われていた。また、以前有人島であった臥蛇島は若者の減少により、この「はしけ」作業を行うことができず無人島化したともいえる。港湾の整備と船舶の安定した運航は村民の生活基盤を支えているのだ。

に子牛は船に乗せられ出荷される。「トカラの牛はたたかれるんだ」と民宿の女主人は言う。理由を問うと船賃がかかるから子牛を持ち帰りたくない。だから、売値が安くても売ってきてしまうらしい。だが、昔は仲買人が来て暴利な値段で買い取っていたため、相場を知らない村民は泣き寝入りをしていた。「だから、今はまだましさ」と他の村民は教えてくれた。最近トカラヤギの放牧にも力を入れている。村を歩いていると突然目の前に飛び出てくるトカラヤギには驚かされる。また、農業ではビワやとらの尾の栽培にも力を入れている。その様ななか、島の牧畜面積の少なさ、島の高齢化、そして運搬にかかるコスト等が産業上大きな問題になっている。

---

## 海に生きる

---

黒潮の流れに沿う十島村にとって、そこに広がる海は大きな資源を内包している。現在十島村では、アオダイ、ハマダイ、キンメダイなど高級魚である底魚の一本釣りが一年中行われている。そして、引き縄でカツオ、サワラ、シラなどを漁獲している。これは主に村内で消費されている。5月から6月にかけてはトビウオが回遊してくるため、刺し網漁が行われ、主に干物にされている。また、沿岸域ではイセエビ、コウイカ、夜光貝などの素潜り漁も行われている。年末はイセエビの注文が殺到する書き入れ時だ。特に宣伝はしなくても、口コミで注文が舞い込んでくると評判は良いようだ。

しかし、これらの漁業には多くの問題点がある。まず、水産業に従事している人は全人口の10%以下と水産業従事者が少ない点が上げられる。また、過疎化に伴い漁業後継者数も低下傾向にある。これらのため、各漁業が小規模で行われている。春には多くのトビウオが回遊して来るが採算を合わせようとすると規模を大きくせざるをえないため、人手が得られない時は漁

を諦めなくてはならなくなる。また、担保となる物件をあまり持たない十島村民にとって、銀行からなかなか融資を得られず漁船の大型化など規模を拡大することが難しい。そして、離島であるため運搬に時間がかかるため鮮度の良い魚を市場になかなか出せない。同時に市場に出すために余計な船賃が必要である。この地域の夏場は台風の通り道であり、冬は季節風で悪天候になる。これらも大きな負の要因だ。また、沿岸域の漁では島内の工事などにより水質が悪化すると顕著に個体数の減少が見られるという。その上、その他の環境問題も大きく資源量に反映していると考えられる。一方、この地域は良い漁場であるために他の地域から多くの漁船が来て操業しており、かなり漁場が荒れてきたという人もいる。このように零細で漁業を行っているため、良い漁場が目の前に広がっていても、悪天候で漁ができなかったり、大型船でやってくる他県からの漁業者に競争力で負けてしまうのが現状だ。

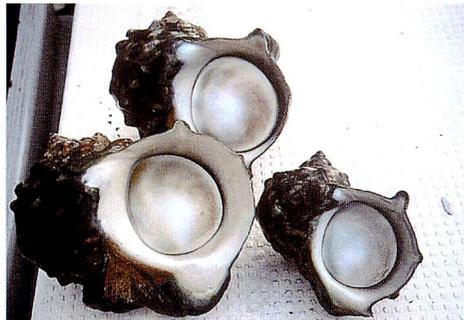
地元で一本釣りを行う漁業者は、今後この地域で水産業を発展していくためには、1) 投資による漁船の大型化、2) 漁業に関する詳しい知

識、3) 地域の特性を活かせる魚の知識だと指摘する。今、彼は役場の援助により港に大型の給油施設を設置している。また、投資をして5トンの漁船を操業している。これにより悪天候においても操業でき、1トン船の時に比べ2倍の操業日数が可能になった。また、昨年村営定期船が大型フェリーとなったおかげで、欠航便が減り、魚の出荷が計画的に行えるようになった。これにより、漁獲された魚はすぐに出荷でき、鮮度の良い魚を市場に出すことができる。市場は新鮮な魚を歓迎するため、少ない漁獲量でもすぐに出荷するという。少量でも安定した新鮮な魚の供給は市場への船賃にみあうメリットが得られている。また、彼は台風などで天気が荒れた後が勝負時だという。他地域の漁船はいち早く避難しているため、天候が回復した時すぐに漁場には出てこれない。その時十島村の漁業者が大型船を持っていれば天候が回復傾向にあればすぐに漁を開始できる。地の利を活かせるわけだ。そして、悪天候のため魚が供給されていないこの時にいち早く魚を市場に出荷すれば高い単価で売買される。この様

に大型漁船を持つことで少々天候の荒れた時でも新鮮な魚を供給でき、トカラの魚の評判は上がってきているという。この時も悪天候に強い大型フェリーとしまの運行が大きな味方になる。

これらのことを考えると今後の水産業発展のための対策として、1) 資源対策、2) 船溜や給油施設の整備、3) 後継者の育成、4) 資金対策、5) 安定した輸送手段の確保があげられる。

多くの漁師が昔に比べ資源量はかなり減ってきたと指摘する。禁漁期による漁獲制限が行われている魚種もあるが、資源量調査などを行い「獲る漁業」から「育てる漁業」への意識改革とより一層の試みが必要であろう。また、多くの正しい漁法などの知識を漁民へ伝えることも大切である。多くの島で港湾の整



素潜り漁で漁獲された夜光貝 ©河合 溪

---

備は整ってきたが、給油施設の整備は不十分である。

しかし、これらの項目は計画的に行わねば、環境破壊と沿岸域の資源量の減少をもたらすことを考慮することが大切である。過疎化の進む島において後継者の問題は大きな問題であるが、Uターン者、Iターン者などを含めた人々に将来像を示すことで解決の糸口が見つかるのではないだろうか。十島村は漁業振興のために融資を行っているが、より一層の強化が期待される。最後に、大型フェリーとしまの就航は大きな存在だ。より一層の安定した運行が期待される。

離島の水産業には多くの問題点が指摘されるが、一方でいち早く近

代化が進んでいる。IT化だ。最近では漁船間の交信も無線だけでなく携帯電話が使われるようになってきた。今までのように無線だとすべての会話がすべての漁船に伝わっていた。しかし、現在は島から20マイル以内であれば携帯電話が使えるため、電話をかけたり電子メールを送ることで、伝えたい相手にだけ漁に関する情報などの色々な事を伝えることができる。また、携帯電話を使うことで瞬時にかつ手軽に現在の天気図などの多くの情報を手にいれることができるため、漁の計画を立てやすくなってきた。情報化の波は日本の隅々にまで及んでいる。

---

## 宝の塩

天然塩の生産は十島村にとって大切な産業の一つだ。そして、宝の塩は十島村において大阪などに出荷される数少ない全国区レベルのブランド品だ。十島村では宝島と小宝島で生産が行われているが、現在、宝島で天然塩の生産に従

事するのは3人と小規模の産業だ。

以前、宝島で天然塩の生産は行われていたが、一時期この産業は衰退した。その後、天然塩の生産は4年前の塩の専売が解禁された時から再開されている。現在、天日と風で乾燥させる方法と釜で炊く方法が行われているが、自然乾燥で生産したほうが味はまろやかだという。生産を始めた時に同時に起こった自然食ブームにのり大きく

発展してきた。

天然塩の生産は島の地域性に非常に合っている。なぜなら、海水は島の周りにふんだんにあり、しかも原料費にお金がかからない。そして、島での生産物は消費地に届けるのに時間がかかり消費地に行くまでに鮮度が落ちることがあるが、塩であればいくら時間がかかっても品質が落ちることはない。しかし、今、大きな壁にぶつかっている。同じような考えを持った生産地が増え、競争相手が増えた事だ。そして、日本人のもつ特性、ブームに乗りやすいが同時に飽きやすい点だ。今、自然食としての天然塩のブームは去っている。従って、供給量は増えたが需要は増えていない。これでは事業を拡大させることは難しい。宝島では生産開始時の生産量は年間2トンであったが、採算は取れなかった。その後、規模を拡大し現在年間12トンの塩が生産可能になったが、現在の供給量過剰のた



宝の塩 ©河合 溪

め生産量は5トンに抑えている。

今後、この産業の発展のためには消費者のより一層の開拓が必要不可欠である。だが、離島であるため消費地に遠いことや、小規模産業であるので宣伝にまわす人材がないため、業者や消費者に直接会い宣伝することが難しい。これに対して、塩生産者はインターネットなどを使い宣伝したり、サンプルを各処に送り消費者を拡大しようとしている。そして、現在は地道に生産を続け、ブームの再来を期待している状態だ。

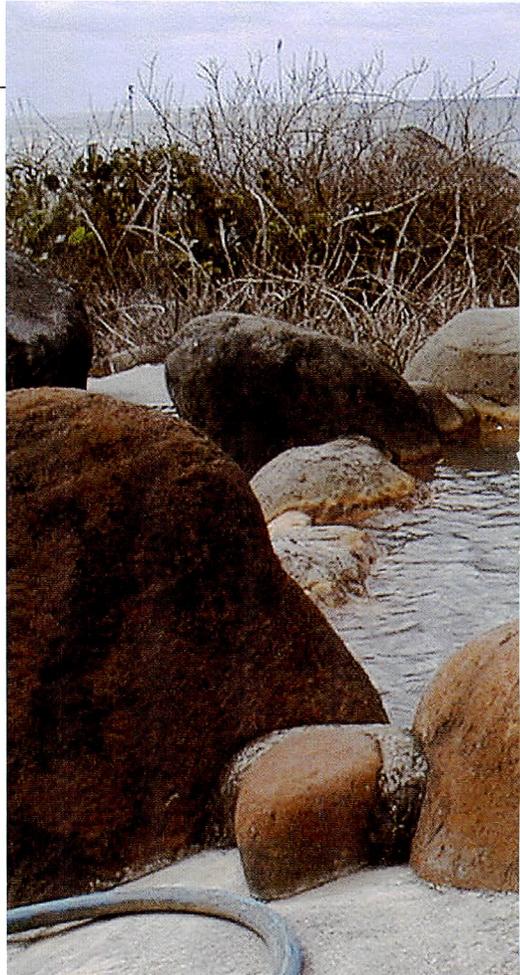
## 将来の展望

トカラ列島は美しい自然を有して

いる。そして、火山列島であるため、多くの温泉が各島にある。神秘性、美しい自然、温泉、おいしい地の食材があれば日本人は集まってくる。行政はこれらを大きな観光資源

としようと考えているが、島民はあまり意識していないようで、そこに大きなギャブが存在するように思う。観光は将来の産業として多くの可能性を秘めているだけに十島村村民の意識改革が必要かもしれない。しかし、一般に観光開発には都会の考えが多く反映されている。島と都会での価値観は大きく異なっており、「島のルール」と「都会のルール」は大きく異なっている。観光開発は地元の意見をよく反映しないとそこには大きな問題が発生するのが現状だ。従って、村民自らが将来の村のあり方を考え、行政との対話を大切にし、共通する考えを持ち物事を進めていかないと観光地十島村の将来は見えてこないであろう。

十島村は高齢化、過疎化、少子化、ごみ、主産業の模索など多くの問題を有している。人口面の対策として、都会の子供を受け入れ島の活性を上げる試み(山海留学)も行われている。山海留学した子供達は多くの喜びを抱え家に帰るが、このシステムには問題も多い。子供達の受け入れ先となる里親が減少してきている点大きい。これにたいして、里親を外部から募集することなどを検討中だ。いずれにせよ、過疎化、高齢化などの人口問題に関し



てはUターン者、Iターン者などを含めた部外者に対してどのように対処していくかが鍵になってくると思われる。また、島民生活の向上には船舶の運航の維持が不可欠である。そして、十島村の今後の発展には運命共同体としての連帯感が大切だ。何処の地域にも道路は大切な交通網であるが、大きな道路が走ってい



悪石島の露天風呂 ©河合 溪

るだけでなく、農道、小道、路地もある。人々は色々な道をたどり、行き来し、交流をしている。“汽船も亦道路なり”の考えを大切にし、フェリーとしまだけに頼るだけでなくもっと多くの道を持つべきであろう。島間で小型船などを運航するなどして、色々な点で交流を深めることが今後の諸可能性を高めるために大切だと思う。

最後に、島の生活は都会に比べすべてがゆっくりと動いているため、十島村発展のためには、将来を見据えた総合的な視点を持ち、「島のルール」と「都会のルール」をうまく調和できる、適切なオーガナイザーが必要不可欠だと考えられる。